

精神的に孤立する高齢者

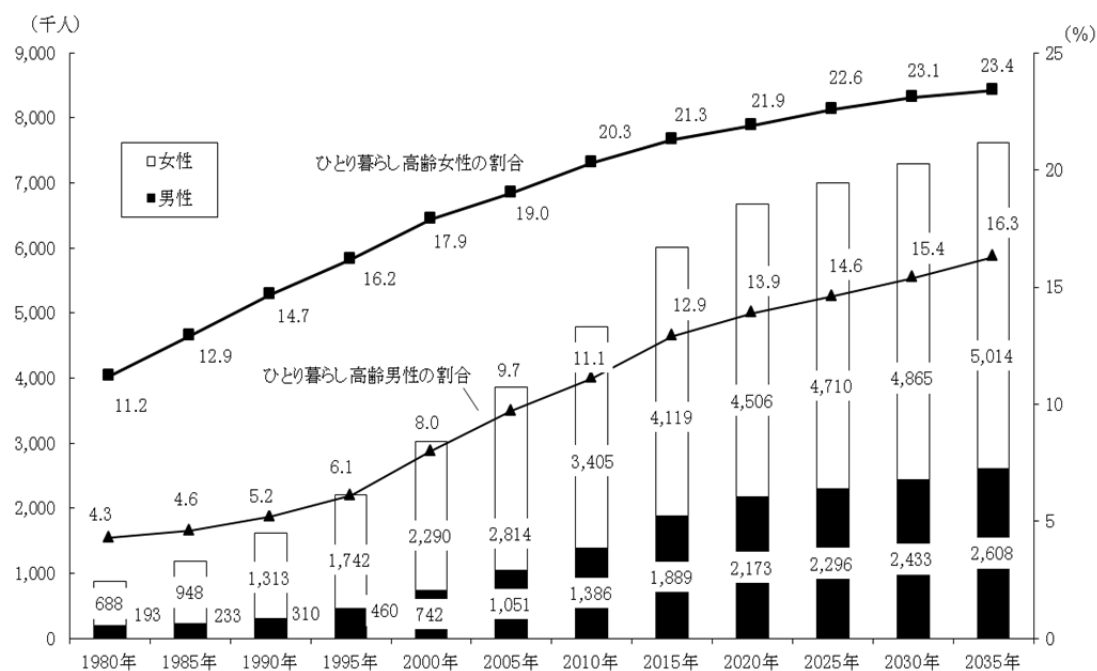
主席研究員 小谷 みどり

<多様化するひとり暮らし高齢者>

2010年の総務省『国勢調査』によれば、ひとり暮らし高齢者は全国に480万人近くもいる（図表1）。1990年と比較すると、わずか20年間で3倍に増加している。ひとり暮らし高齢者が65歳以上人口に占める割合は、1980年には男性4.3%、女性11.2%だったが、2010年には男性11.1%、女性20.3%と、男女ともに増加している。

国立社会保障・人口問題研究所の推計では、特に男性のひとり暮らし高齢者の増加が著しく、2035年には2010年の倍近くの260万人に達し、高齢者人口に占める割合も男性では16.3%と、6人に1人の男性高齢者は独居となる計算だ。2010年には、女性のひとり暮らし高齢者は男性の2.5倍程度を占めていたが、2035年には2倍を下回ることから、これまでひとり暮らし高齢者は、夫と死別した女性の姿として捉えられがちだったものの、今後は、ひとり暮らし高齢者像が多様化すると考えられる。

図表1 ひとり暮らし高齢者数と、ひとり暮らし高齢者が高齢者人口の占める割合の推移（性別）



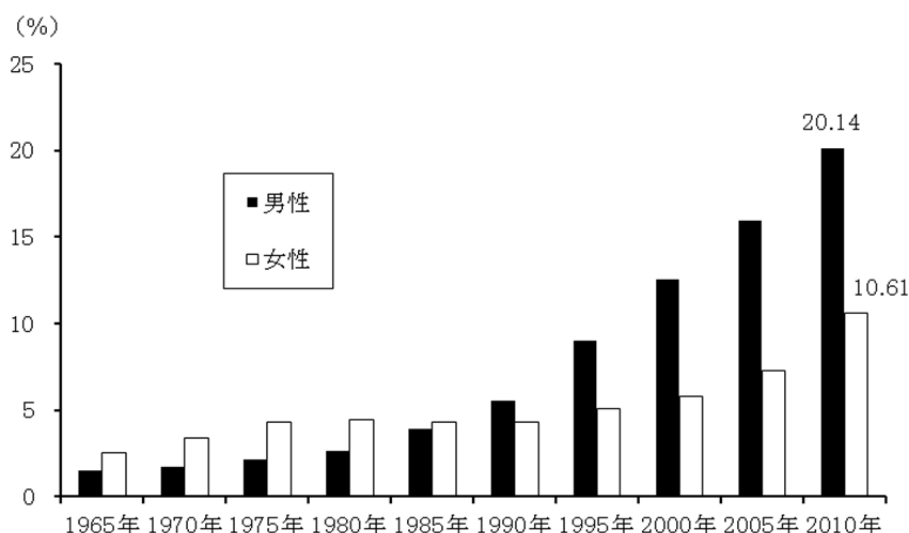
資料：2010年までは総務省『国勢調査』、2015年以降は国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口（2013年1月推計）』『日本の世帯数の将来推計（2014年4月推計）』を元に筆者が計算、作成した

世帯主が65歳以上の高齢世帯では核家族化が進む。2010年の厚生労働省『国民生活基礎調査』では、高齢世帯のうち、単独世帯は24.2%、単独予備軍ともいえる夫婦のみ世帯は29.9%にものぼっているが、国立社会保障・人口問題研究所の2014年推計によれば、2035年には東京では、世帯主が65歳以上の高齢世帯のうち、44.0%がひとり暮らし世帯になるという。他に4割を超える都道府県は、大阪(43.8%)、鹿児島県(43.1%)、高知県(42.7%)、北海道(41.8%)、京都(41.4%)、和歌山(41.2%)、兵庫(40.8%)、愛媛(40.4%)と続いており、最も少ない山形(28.3%)と比べると、大きな差がある。ちなみに山形県では、2010年時点で高齢世帯が全世帯の38.2%を占めているが、2035年には48.6%にまで上昇すると見込まれており、東京の35.8%に比べると、いかに高齢化が深刻な問題となっているかがみてとれる。

しかし、高齢者の増加に加えて若者の流出により高齢化が進む地域と、ひとり暮らし高齢者が急増する地域では、解決すべき問題の性質が異なる。例えば前者では、年金生活の世帯の増加や世帯数自体の減少で、消費の低迷など経済活動に大きな影響があるだろうし、後者の地域では、孤立死の増加、介護ニーズの高まりや社会保障費の増大にどう対処するかが問われる。

ところで、ひとり暮らし高齢者が増加する背景の一つには、離死別や未婚など、配偶者がいない人が増えていることが挙げられる。50歳時点で一度も結婚経験がない人の割合を示す生涯未婚率は、2010年には男性で20.14%、女性では10.61%だったが、特に1990年以降、一度も結婚経験のない男性が急増している(図表2)。その結果、10年ほど前から未婚男性が続々と高齢者の仲間入りをはじめている。

図表2 生涯未婚率の推移(性別)

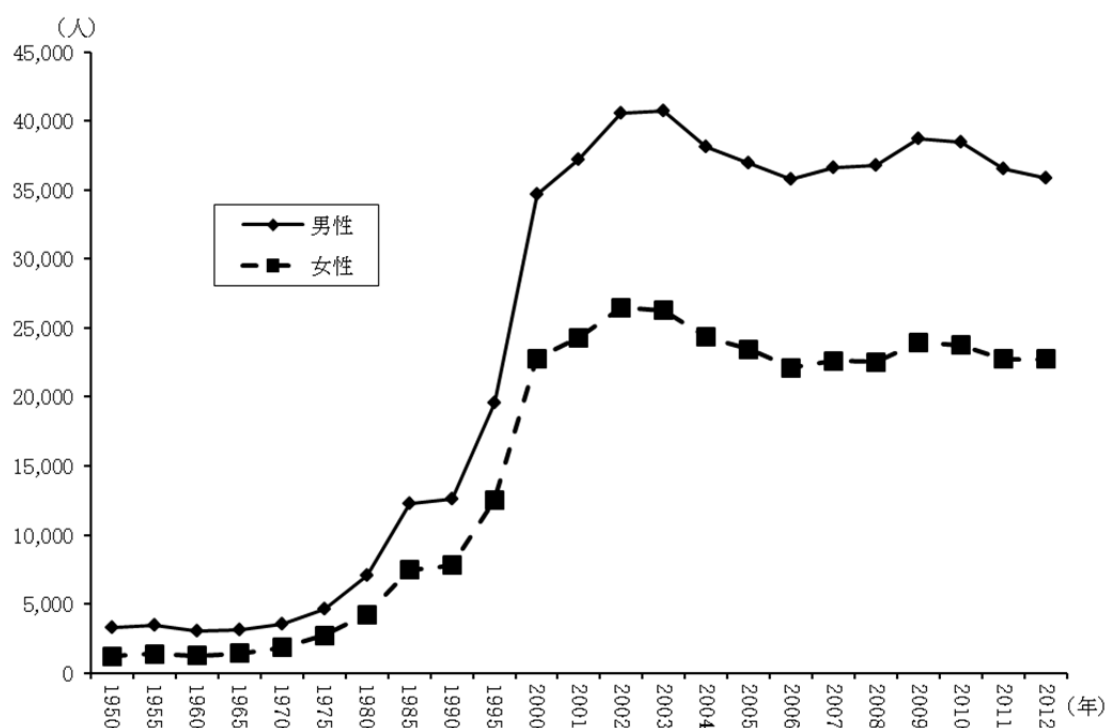


資料：国立社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集(2014)』

一方、熟年離婚も増えている。厚生労働省『人口動態統計』によれば、2012年に50歳以上で離婚した人は、男性で3万5,866人、女性で2万2,747人いたが、1970年からの40年間で男女ともに10倍以上に増加している（図表3）。なかでも1990年から2000年までの10年間の増加率は300%近くもあり、熟年離婚の増加は、この20年間の傾向であることが分かる。

また結婚してから離婚するまでの同居期間をみると、2012年の離婚のうち、「20年以上」の同居が全体の17.5%を占めたが、1975年にはわずか5.8%しかおらず、49.4%は「5年未満」であった（図表省略）。このことから、離婚時年齢が高くなっているだけでなく、同居期間の長いカップルの離婚の割合が近年、増加している。

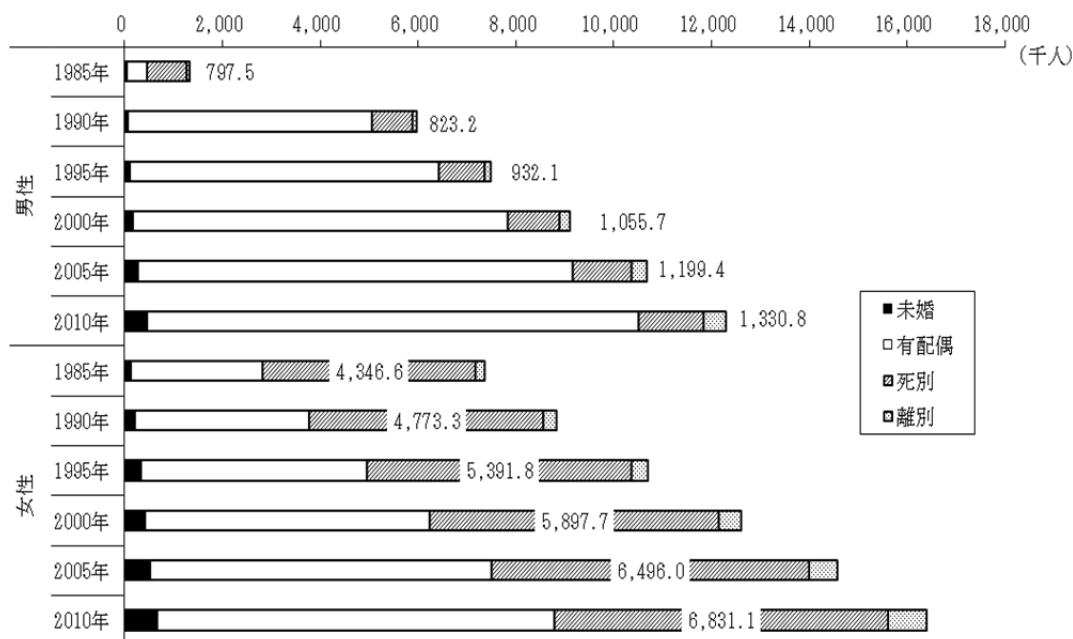
図表3 50歳以上で離婚した人の数の推移（性別）



資料：厚生労働省『人口動態統計』

さらに高齢になると、配偶者との死別を経験する人が増える。2010年に配偶者と死別した65歳以上は、男性で約133万人、女性で約683万人いたが、1985年と比較すると、それぞれ1.6倍前後に増加している（図表4）。

図表4 65歳以上の配偶者関係の推移(性別)



注：図中の数値は死別者数

資料：厚生労働省『国勢調査』

<孤立する高齢者>

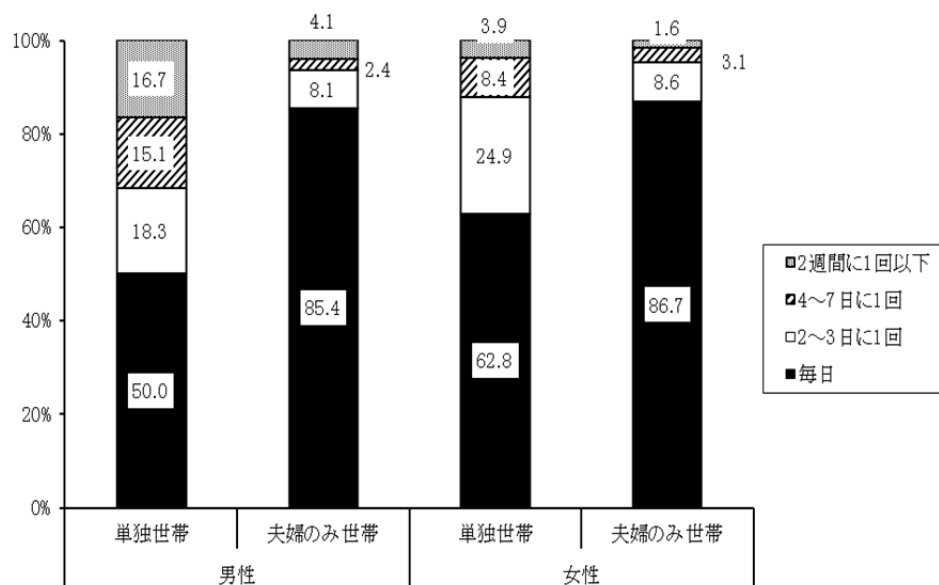
以上のように、配偶者がいない人の背景はさまざまだが、なかでもひとり暮らし高齢者は孤立しがちであることが明らかになっている。国立社会保障・人口問題研究所が2012年に実施した調査では、65歳以上のひとり暮らし男性のうち、家族を含め、誰かと毎日会話をすると回答した人は半数しかいなかった(図表5)。65歳以上のひとり暮らし女性でも、毎日会話があるのは62.8%と、3分の2にとどまっている。

会話頻度が少ないだけでなく、家族とのきずなを感じられない人も少なくない。第一生命経済研究所の調査では、60歳以上の人で、家族と強いきずなで結ばれていると感じていない人は、ひとり暮らしの人では25.5%に達した(図表6)。

しかし全体でみても、家族と強いきずなで結ばれていると感じていない人は17.7%と少なくない。図表5でも分かるように、同居する配偶者がいても、毎日会話しない人は男女ともに15%程度もいる。

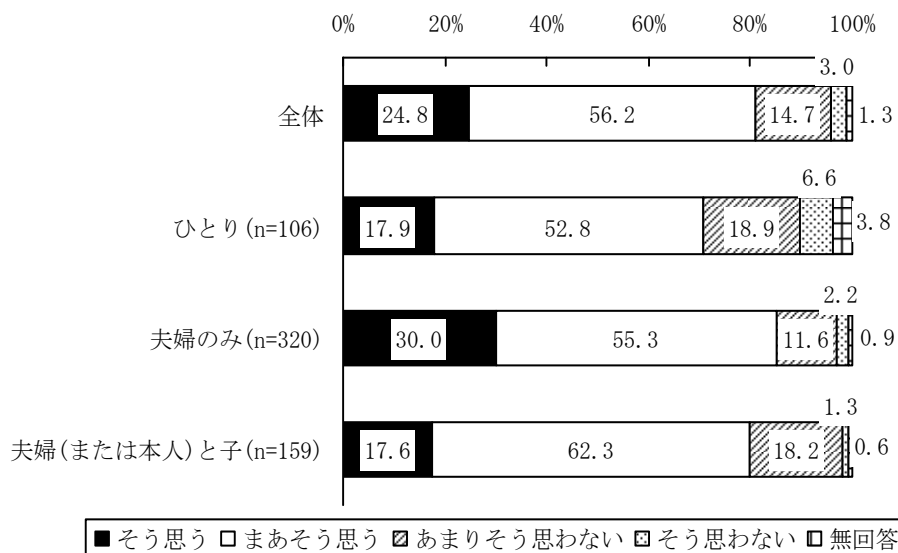
友人関係も同様で、「一緒にお茶や食事を楽しむ友人」「一緒に趣味を楽しむ友人」がいる人は多いものの、「困ったことがあれば相談しあえる友人」「自分のことを理解してくれる友人」など、精神的な支えとなりうる友人がいる人は半数に満たない(図表7)。会話がな、家族とのきずなを感じられない、理解しあえる友人がいないといった状況は、ひとり暮らし高齢者に限ったことではないのである。

図表5 普段、家族や他人とあいさつ程度の会話や世間話をする頻度



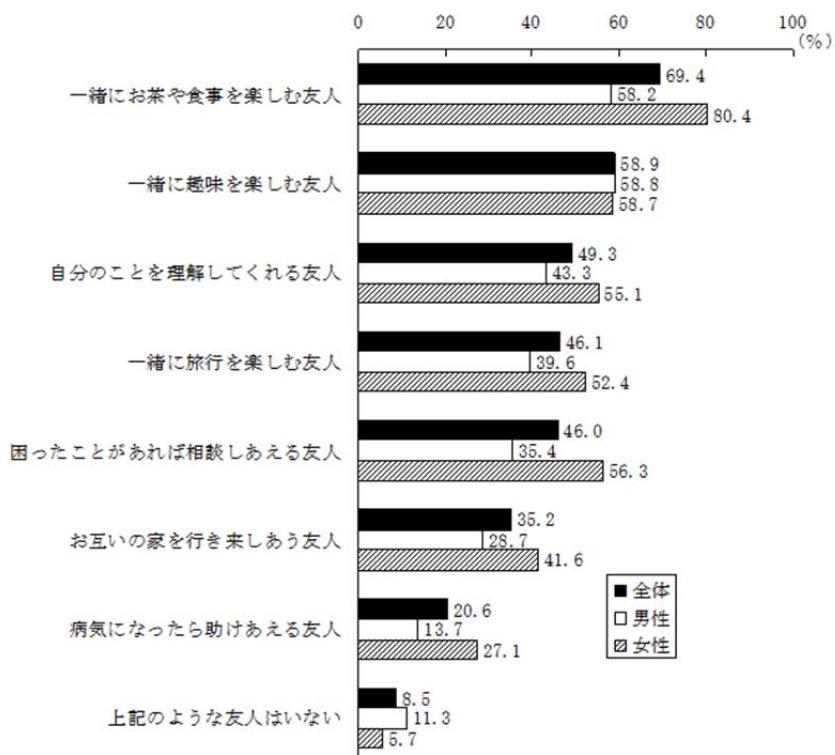
注：調査は2012年7月に65歳以上の男女を対象として実施された。有効回答数は約2万1,000人。
 資料：国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合いに関する調査」

図表6 家族と強いきずなで結ばれているか(全体、同居形態別)



注：調査は2010年9月に、60歳から85歳までの男女700人を対象に実施した。本稿では、居住形態が「ひとり」「夫婦のみ」「夫婦（または本人）と子」のみの分析結果を掲載している。
 資料：第一生命経済研究所『Life Design Report』（Summer 2011.7）：16-27

図表7 友人の有無(全体、性別)＜複数回答＞



資料：図表6と同じ

中高年のライフスタイルが多様化し、なかでもひとり暮らし高齢者が急増していくなか、特に高齢者の「精神的な」孤立をどう防止するかは、誰もが直面する可能性があるという意味でも、社会全体が取り組むべき課題であろう。

(研究開発室 こたに みどり)